

# 教会に傾斜する庶民

## —トンガ王国エウア島の寄付集めの事例から—

文化科学研究科・地域文化学専攻 森本 利恵

### 1. はじめに

トンガの地域社会や教会では、寄付集めを盛んに行っている。人々の世帯収入の大半は、海外の親族からの送金に占められており、その現金収入は生活費としての日用品の購入、教会への献金、村での寄付集めに使われる。

トンガ王国エウア島の村々の場合、村での様々な寄付集めは、村単位で行う場合と、教会単位で行う場合がある。これを村の人々は、ファカフォヌア (*fakafonua* 村もしくは地区単位) とファカシアシ (*fakasiasi* 教会単位) という言葉によって使い分けている。このような村人たちの言葉の使い分けは、彼らの教会もしくは政府 (王) に対する伝統的な慣行の一つであるファトンギア (*fatongia* 義務) に関する概念と密接に関係している。

これまでファトンギア (*fatongia*) は、本来、人々が彼らのチーフを満足させるために行われる obligation [James 1988]、チーフのために庶民が強いられる duty [James 1997]、チーフのために庶民が行う無償の労働 (work) [Wood-Ellem 1999] とされてきた。現代においては、ファトンギアはチーフだけでなく、家族に対しても使われる [James 1997]。一方、ファトンギアの類似語であるカヴェンガ (*kavenga*) は、負担や重荷 (burden) ・責任 (responsibility) を意味し [James 1997]、親族関係にあるチーフに対して人々が負う duty [Wood-Ellem 1999] であるとされる。

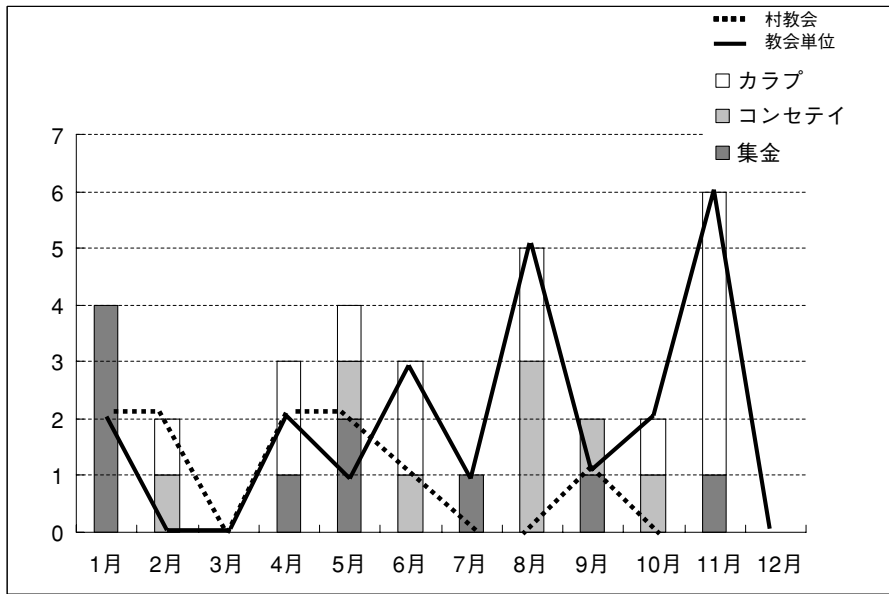
このように、本来のファトンギア (*fatongia*) は、歴史的に王やチーフに対して庶民 (平民) が行っていた tribute (貢物) が原義となっている。これを言葉の使い手である現代のトンガ人がその置かれた状況や立場に応じて、外的な事情から生ずる義務 (obligation) と内的なもの (正義感・道徳・心・良心など) による義務 (duty) のいずれの領域をも含みながら、多義的に使用している。そこで本論は、ファトンギア (義務) をめぐる近年の多義的用法の中で、現代のトンガの人々がファカシアシとファカフォヌアにおいてこれにどのような概念をあたえているのかを考察する。

### 2. 村での寄付集め (*feinga paanga*)

トンガ王国の村々では、公式行事に関係なく、日常的に寄付集め (fund-raising) が行われる。その方法には、①ターナキ・パアング (*tanaki paanga*、各家を回って行う集金、場合によっては、イモなどの物による持ち寄り)、②コンセティ (*konseti*、催し物を開いて人を集めその参加者から寄付を募る。伝統舞踊や寸劇が行われる)、③カラブ (*kalapu*、カヴァを飲みながら寄付を募る) の3つの形がある。このうちカラブは、男性だけの社交場であるのに対して、コンセティは老若男女を問わない村の人々の娯楽の場である。

図1は、2002年1月～12月までの12ヶ月間に、エウア島O村で行われた寄付集めを先の3つの形態別に、月ごとの回数で示したものである。

図1 O村で行われた寄付集め



注) 4月の集金の1回分と6月のクラブの1回分は、村単位と教会単位の両方で行われた。  
7月は全島のFWC信徒が集まり台会合を開くため、牧師や幹部信徒は島を不在にする。

これによると、この年の寄付集めは、3月と12月を除いて1年間で合計32回、平均月に2.6回行われた。特に5月から6月はバナナ、11月はカボチャの買い取りがあり、これらの換金作物を栽培する農家では、まとまった現金収入が入るため、この時期を含めた前後にコンセティやクラブがどの教会でも積極的に開かれた。

O村で行われた①～③の方法による寄付集めは、(1) ファカシアシ (教会単位)、(2) ファカフォヌア (村単位) と、(3) この両方で行われる場合 (図1の注を参照) があった。図1の折れ線は、ファカシアシ (教会単位) とファカフォヌア (村単位) の寄付集めを月別に示している。ファカフォヌアが合計10回であったのに対して、ファカシアシは23回を数え、全体の7割を占める。これはO村で最多の信徒数を持つ自由ウェズリアン教会 (Free Wesleyan Church of Tonga、以下FWCと略す) の寄付集めの多さによる。

#### (1) ファカシアシ (教会単位) の寄付集め

O村のFWCが行った寄付集めのうち、以下では8月の寄付集め (集金) とウェズリアン系H高校のために行われたコンセティの事例を検討する。

### 8月の寄付集め

O村のFWCでは、信徒を9グループに分けている。このうちの3グループ (牧師長のグループ、O村の村付きのチーフMN氏のグループ、同じくO村の村付きのチーフMT氏のグループ) が、8月の末日に合同で寄付の持ち寄りを行った。これには島の牧師長<sup>1)</sup>より、1世帯当たり300パアング (トンガ・ドル) の現金と、翌日行う予定のクラブ用のカヴァ粉末1～2キロを持参するよう求められていた。

T家のL夫人は、カヴァ粉末2キロ分を持ち寄ったが、これが300パアングに満たなかったため、足りな

い分を再び持参するという。E家は300パアングを現金で寄付したが、クラブ用のカヴァは持参しなかった。その一方で、参加者のなかには、寄付をしない者もあり、彼らは寄付ができない理由を牧師長に説明していた。こうして、事前の取決めにも関わらず、この夜は1世帯当たり300から100パアング、合計5,410パアングの現金と6世帯からカヴァの粉末が集められた。

昔からあったこの8月の寄付の一世帯あたりの金額は100パアング程度だったという。しかし、牧師長のN氏が着任すると、これが150パアングに、2年目には200パアングに、3年目には300パアングに引き上げられていった。現金を得る機会が限られている農民にとって、この多額の寄付金を用意するのは容易ではない。

### ウェズリアン系H高校のために行われたFWCのコンセティとクラブ

ウェズリアン系H高校への寄付集めのため、毎年各村のFWCでコンセティが行われる。主催者側はコンセティを開くことでお祭りムードを高め、FWCの信徒以外の見物客からも寄付を募ろうとしていた。

O村のFWC信徒の9グループは、それぞれ踊り子を1人ずつ出し、その上に牧師長からは各グループが最低でも500パアングの寄付金を集めるよう指示されていた。

夜8時過ぎ、FWCの礼拝所前の広場には、伝統的な踊りの衣装に身を包んだ少女が登場して踊り(*taolunga*)を披露した。その後、ココナッツ・オイルを塗った少女の子の体に、観客が列をなしてお札を貼り(*fakapale*)にで、1、2、5、10、20パアング札が貼りつけられた。

少女の家族や親族をはじめグループの信者は、1パアングでも多くのお札を一般観客から得るとともに、自らも少しでも多くのお札を貼ろうと懸命になっていた。あるグループは、踊り子の少女に貼るお札を600パアング用意していた。そのお札はすべて寄付されるのだが、コンセティでは、一人の踊り手が終わると、その踊り手の名前と体に貼り付けられたお札の金額が拡声器を通して読み上げられる。その金額が前に踊ったグループより多いと、参加者の夫人たちは喜び叫んだ。こうして各グループは寄付の金額を競い合う。それは当事者だけでなく、参加した観衆の最大の関心事でもあった。

コンセティの会場の片隅にはクラブが開かれ、その席にはFWCの牧師長をはじめ、村付きのチーフとトーキング・チーフ、政府代理人<sup>2)</sup>、村長、教会関係者、H高校の校長、カボチャの輸出業者の代表らが座を占めていた。彼らは踊りを見ながらカヴァを飲み、その場で寄付金を出し合っていた。

以上、いずれの場合も教会側が設けた信徒のグループで寄付が持ち寄られている。各グループは、更に幾つかの小グループに分かれており、グループごとにノルマが決められている。これらのグループ長は、「村付きの」チーフとトーキング・チーフ(チーフの従者)のタイトルを持つ年長者が兼任している。(こうした現在の村付きのチーフは、王国の統一以前に存在していた伝統的な土地のチーフとは若干異なるため、「村付き」という言葉で区別した。)彼らは、各村の核となる親族集団の長であり、村長や地区長といった政府の行政組織と並立して全ての村に存在する。

#### (2) ファカフォヌア(村単位)の寄付集め

ファカフォヌア(村単位)で行われる寄付集めの場合、O村の村長や村の委員会は村人の意見を聞くことなく、村内を居住地で一時的に12のグループに分けた。グループには、同じ親族集団にある世帯も含まれていたが、異宗派の世帯も含まれていた。これは、ファカシアシ(教会単位)とは対照的であった。

## エウア高校<sup>3)</sup>のコンピューター購入資金のための寄付集め

O村の村長・地区長<sup>4)</sup>・会計係・前国会議員ら10人ばかりの委員が集まり会合が開かれた。議題は、コンピューター購入資金の分担金の捻出である。

この会合で地区長を勤めるH氏は、「各家で1本ずつカヴァを持ち寄り、それをアメリカに売ってはどうか。そうすれば10,000パアングは確実だ。」という。これに対して前国会議員のT氏は、既に村のカヴァ飲みクラブでは、参加者の家ごとに1キロのカヴァを持ち寄り、それをアメリカに送って資金を集めると伝えてある。その方がコンセティを開いて村人から寄付金を募るよりも、村人の負担が少なくて済むという。

O村の男たちは、自家消費以外に1世帯につき、500本のカヴァを植えるように申し合わせている。カヴァの栽培はさし木法によるため、村人の負担はさほど大きくない。そのカヴァ500本は、村の寄付集めや教会活動などの資金源となる。しかし、この夜の会合ではとりあえずコンセティを開催して、O村の分担分であるコンピューター2台分の購入資金を募ることにした。

## 道路の補修作業のために行われるコンセティとカラブ

サイクロンの後に、村から畑への道の補修が必要となった。このため村長が主催して、補修費用を集めるコンセティが村のホールで行われることになった。しかし、このコンセティ会場には、踊り(*taolunga*)も寸劇もカラブの支度も用意されていなかった。コンセティと聞いて、踊りや寸劇を楽しみに来た人たちは、がっかりして家路についた。ただし、このファカフォヌア(村単位)のコンセティには、各世帯であらかじめ分担金額が決まっていた。会場を訪れた人は、分担金である寄付金を会計係に渡して名前を記入した。コンセティという名ばかりのこの寄付集めによって、一晩で2,000パアングが、また現金が用意できない家からは、換金用の袋詰めされた干したカヴァが村長宅に持ち込まれた。

この翌月、村内の道路の補修のためのカラブが行われた。1ブロック(地区)分の道路の補修には最低500パアングが必要である。村長は1世帯当たり20パアングを持ち寄るように求め、寄付金が集まった地区から補修を始めることになった。村のホールでは、村長をはじめ村の委員がカヴァを飲みながら、寄付金を待った。しかし、村の男たちはカラブの会場に姿を現さなかった。O村の男たちは、他村のカヴァ飲みクラブに呼ばれて出かけていたからであった。しかし、出先の村のカラブ(教会が主催する寄付集め)は、葬式を行うことになったために中止となり、帰村した男たちはホールで開かれていたカラブ(村が主催する道路の補修作業の寄付集め)に合流した。村のホールでは、深夜まで男たちによる歌とギターが流れていた。しかし、村長は、「人は集まったもののお金は140パアングしか集まらなかった」と嘆いた。村のホールでは、翌月も道路の補修のためのカラブが開かれた。

## 王の生誕祭と農業祭

トンガ王国エウア島の人々は、2001年に、王が参加する国家の二つの公式行事(毎年7月に行われる王の生誕祭と、三年に一度9月に開かれる農業祭)に関わることになった。政府からの通達は、中央政府が派遣する政府代理人HT氏(他の島の知事に相当する)にもたらされた。その内容は、7月の王の生誕祭では、エウア島の村人が王と王族に島の踊りを披露すること、また9月の農業祭では、エウア島の会

場に王と王族、ノーペレ（貴族）<sup>5)</sup>が来島するというものであった。

その年の4月、政府代理人HT氏は、エウア島の自治に関わる代表者の会合（毎月末に開かれる）で、政府の通達を伝えた。会合には、地区長（2名）と村長（15名）、農業省エウア島事務所の役人（1名）が出席した。島の代表者の会合は、これら行事の実行委員会を兼ねることになった。席上HT氏は、「両行事ともファカシアシ（教会単位）ではなく、ファカフォヌア（村単位）で行う」ことを強調した。このHT氏の発言には、王を迎える行事は島の一大事であり、各島民が王国の民であるという意識を今一度持つといった意味が込められていた。従来、ファカシアシ（教会単位）の行事では村人たちが積極的に協力し、ファカフォヌア（村単位）の行事には人も寄付金もほとんど集まらなかった。それをファカフォヌアでやるには、村人たちをどう盛り上げていくかが実行委員会の課題となった。

首都のトンガタブ島にある王宮で行われる生誕祭には、踊りの前日に挨拶のために王宮を訪問する際の王への献上品（樹皮布、巨大なブタ、2メートルもある根付きのカヴァ、そして100本以上のヤムイモ）と、当日の踊りの途中で王や王族に献上される約50メートルの巨大な樹皮布が必要であった。

巨大なブタと根付きのカヴァを用意したのは、エウア島の王族地<sup>6)</sup>にあるH村であった。H村の村長は、実行委員会の席上、「王のために用意するのは光栄なことだ。エウア島の王の土地（トフィア）に住む我々のファトンギア（*fatongia*）である」と言ってこれをひきうけた。100本のヤムイモは、エウア島の全15村が分担することになった。ヤムイモは、その年に出来た最高級のヤムイモ（*ufi lelei*）でなければならなかった。このうちO村（政府地にある）は、20本を用意することになった。樹皮布は、各村の女性グループ（各教会ごとに分かれている）に任せることになった。

この会合が終わった日の夜、O村の村長は、畑仕事を終えた男たちを待って、O村の委員会を招集した。そこではO村が分担するヤムイモについて、ファカフォヌア（村単位）で行うことがとり決められた。つまり村内の居住地を12グループに分け、グループごとに4本ずつのヤムイモを持ち寄り、合計48本のヤムイモを集め、その中から良質の20本を選ぶことになった。この2ヵ月後、村はさらに王を迎えて9月に行われる三年ぶりのエウア島での農業祭にも、同様にヤムイモ40本用意することになる。

会合から3日後、各村のホールで村会議（*fono*）<sup>7)</sup>が開かれた。村会議は、毎月第1月曜日の朝7時半頃から開かれ、村人なら誰でも参加できる。O村の村会議では、村長、村の会計係を囲むように、自然に男女に別れて床に座った。参加者は、村会議が行われる集会所の近隣の村人が中心で、O村の16歳以上の人口約1,000人<sup>8)</sup>に対して、この時は20人にも満たなかった。通常の村会議の参加人数も、20人から30人程度である。村会議は、公式行事への参加とその準備として村を12グループに分けるファカフォヌア（村単位）でヤムイモを集めることを伝えただけで終わった。

以上、ファカフォヌアの寄付集めを目的に別にまとめると、エウア高校のコンピューター購入資金の例では、この高校に生徒を持つ世帯が中心となって寄付の呼びかけを行った。道路の補修作業の例では、居住区ごとに時期をずらし（例えば、Aブロックの道の舗装の次は、Bブロックの道）、数回に分けて行われた。自分の家と畑が面する各道の補修作業であったが、村人の多くは「サイクロンが来ればまた補修が必要となるし、現状のままでも生活はできる」という意見が大半を占めていた。結果的に完成（2003年）までに、2年以上のファカフォヌアでの寄付集めを行ったのである。王の生誕祭と農業祭の例は、3年に一度あるかないかの公式行事への参加は、王族や貴族の来島が非日常的なエウア島の人々の中でも、王や王族への敬意が必要とされる役職や立場にある者による積極的な参加に限定されていた。

### (3) ファカシアシ（教会単位）とファカフォヌア（村単位）の二重の支出

葬式にあたって、故人宅に送られる見舞金の集金が、ファカフォヌアとファカシアシで行われた。村長は、村内の全ての家から1パアングの集金を行うことを村会議で伝えた。これに対して、O村のFWCでは、牧師長が各信徒宅から3パアングを集めることが伝えられた。O村のFWCのある信徒は、「前の牧師長の時は1パアングだったのに、新任の牧師長は3パアングを集めるようになった。教会で出しているのだから、村長が集める1パアングは必要ない」という。それは誰も公に口にしないが、こうした二重の支出は村人全体の悩みの種となっていた。

ある月のO村の村会議では、葬式の見舞金についてグループごとの集金状況が報告された。しかし、一向に現金が集まらず、次に葬式があった時には用意できないという状況にあった。グループごとに集めることで自分の家が参加しているという自覚がでるとの考えのもとO村の村会議は、ファカフォヌア（グループ単位）で集金することを目標とした。しかし結果的に、村長が直接各家を回り集金がなされた。

次にこのようなファカシアシ（教会単位）とファカフォヌア（村単位）の寄付集めに、村人であり信徒である個人の対処を示す。

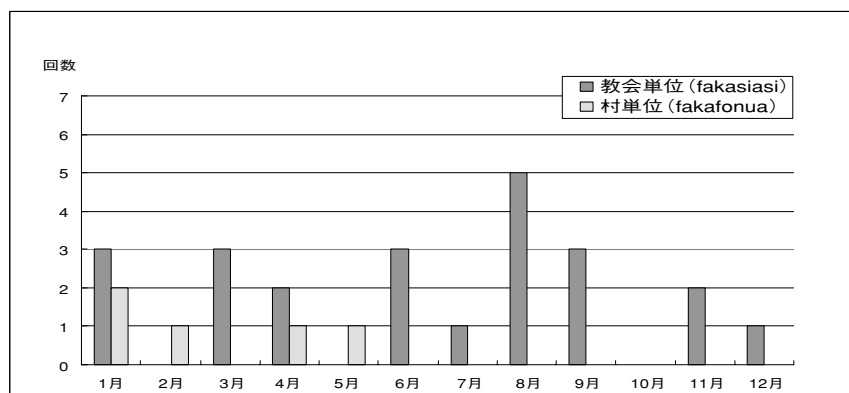
## 二重の支出とその回避

図2は、O村のT家が1年間に行った寄付の回数である。そこには季節により、所属教会であるFWCへの貢献と村への寄付参加という二重の支出がある。

そのT家が1年間に行った寄付は28回で、O村で行われた32回の寄付すべてに参加している訳ではない。その内訳は教会が23回であるのに対し村へは5回である。教会の寄付には、年1回の信者を招いての祝宴（*fakaafe*）、年に2回の青年男女と少年少女を対象にした泊り込みの聖書の学習会（*apitanga*）への料理の持ち寄り、年4回の四半期の会合（*kuata*）での寄付、年1回の大会合（*konfelenisi*）、そして毎年11月の第4土曜日に行われる大規模な献金（ミシナレ、*misinale*）<sup>9)</sup>とその後の大宴会への料理の持ち寄りがある。

図2に示したT家の寄付は、参加回数で示したものだが、その金額はきわめて高額にのぼる。例えば、11月に行われるミシナレには、T家（6人家族）は合計1,900パアングを寄付（献金）している。T家の未亡人で無職のL夫人でさえ1,000パアングに達する（内訳は600パアングが海外の長男夫妻からの送金、三男と次女夫婦から各200パアング）。

図2 T家の寄付集めへの参加



O村のFWCでは、この他にも8月に、青年部が主催するクラブが島中の男を対象に大規模に行われた。このクラブで集まった現金は、11月のミシナレに青年部から教会に寄付される。また、一般信徒の家では、自分の畑からカヴァを掘り出して粉末にし、村のクラブ（O村では毎週水曜）や教会のクラブに提供し、カヴァを飲みに来た参加者から寄付を募っている。このような信徒主催のクラブは、10月の終わりからミシナレの始まる前夜まで続く。なかには信徒としての教会への貢献を快く思わないものや、度重なる出費についていけない者が改宗した例がある。それには二重の支出を強いられることが大きく関わっている。

一方、エウア島のT村（村人の9割がFWC信徒）の場合、村の教会の礼拝所の建設を計画しており、その資金集めのために1年間かけてエウア島とトンガタブ島の村々でコンセティを展開していた。それでも必要な費用の半分にも満たなかった。村人はその上に度々行われるファカフォヌア（村単位）の分担金に頭を悩ませていた。そこへ各村が持ち回りで主催するラグビーでH島から訪れているチームの滞在費用（船代と食事代）を募るコンセティが開かれた。ここでも、少女たちは伝統的な衣装で登場し、一人の踊りが終わる度に拡声器の音が村中に響いた。

T村はこのコンセティの踊りに、T村の少女に加えて、隣のH村の少女を呼んでいた。H村の少女が踊り始めると、H村の村人や牧師が次々と少女にお札を貼り付けた。読み上げられた金額は、前に踊ったT村の少女より多かった。お札貼りは、この日の主賓であるH島のラグビーチームのメンバーからも行われた。人口が少ないT村のコンセティにも関わらず、この日は2,000パアングが集まった。その一部が、ラグビーチームへ送られ、残りはエウア高校のコンピューター購入費に充てられた。二重の支出を少しでも解消させるために、T村がとった苦肉の策であった。

以上、寄付の目的に注目すると、ファカシアシ（教会単位）とフォアカフォヌア（村単位）の両方の手段で二重に寄付集めが行われたのは、サイクロンの被害にあった他島への食料支援（1月）、畑と村内の道の整備資金（4月）、村人の葬式の見舞金（1月と4月）、島代表のラグビーチームの遠征費（2月、6月、9月）であった。このうち葬式の見舞金とラグビーチームの遠征費が毎年定期的に行われる寄付であるのに対して、食料支援や道路整備を目的とした寄付集めは、例年行われるものではない。定期的な寄付集めに加えて行われたこの年の寄付で、寄付集めに際して行われた主催者側（行政と教会）の会合で度々口に出されたのは、いずれも「今回の寄付が、エウア島の島としての団結と威厳の存在を表すものであり、同時に他島からの評価を得ることになる」という意見であった。つまり、1パアングでも多くの寄付を集めることが必須であるという主催者側の判断が、村人への二重の寄付集めの実行に繋がったといえる。事実、二重の寄付集めでも目標金額に達しなかったために、各2回以上、期間を延長して寄付集めが行われた。

また、寄付集めの方法に注目すると、ファカシアシの場合、教会の牧師と幹部が事前に信徒の意向を聞き、親族関係と居住地を考慮してグループ分けを行った。そして、親族集団の長と村付きのチーフを兼任する年長者の男性を各グループ長に据えることで、彼らの指揮が課せられたノルマの達成に繋がった。その一方で、ファカフォヌアの寄付集めが村長や村の委員会の一存で、他の親族集団と異宗派の世帯も含む居住地による一時的なグループ分けが行われた。その結果、現金や作物を村人から集めることが、非常に困難であるという現状に突き当たる。

### 3. 考察

先行研究では、伝統的に行われてきたファトンギア (*fatongia*) は、相互依存の関係を意味しており、階層的な立場関係に特徴づけられる[James 1997:12; Morton 1996:92]。従って、現代のエウア島のような離島の村では、伝統的でかつ階層的な立場関係がより強く見られる場面（王の生誕祭や農業祭）は、人々と王との関係の再確認がなされる機会であり、そこで行われるファトンギアは、エウア島の人々にとって日常的には起こらない場面での王に対して行うべき行為とその再現の場となっている。

これに対して、王の生誕祭や農業祭といった国レベルでの公式行事はもとより、道路の補修などの公共的なものはファカフォヌア（村単位）であり、その際には村の全ての家から徴収することが基本であった。しかし、村長や執行部がファカフォヌアで行う寄付集めは、うまく機能していない。一方、ファカシアシ（教会単位）のカラプやコンセティは多額の寄付を集めている。村人は自分の所属する教会主宰の会合や行事には、熱心に対応している。村の執行部はファカシアシでの寄付集めを同じ目的で行うことを教会に頼み、教会は信徒グループごとにノルマをかけて寄付集めを行い資金調達に成功する。

このような違いが生じるのは、第一に、伝統的なファトンギア（義務）が人々のファカフォヌアやファカシアシという言葉の使用に見られるように、その対象が日常化していること。第二に、ファカフォヌア（村単位）の寄付集めが、村長を始めとする行政上の義務であるのに対して、ファカシアシ（教会単位）の寄付集めが、宗教的価値観に支えられた社会的で内的な義務付けを伴うものとして、人々に捉えられていること。第三に、寄付集めの際のグループ分けが、親族集団と宗派によって構成されるファカシアシでは、他の親族や他宗派を意識した他者への競争意識を刺激する。これが居住区だけでグループ分けされたファカフォヌアには欠けているという点が指摘できる。

従来、伝統的に村を仕切っていたのは、いわゆる村のチーフやトーキング・チーフであった。土地のチーフは、人々に土地に対しての権威と信仰的な権威を持ち合わせていた。しかし、トゥポウ I 世（1797年～1893年）のトンガ統一による社会構造の変化とキリスト教の布教がもたらした価値観の変容は、人々に大きな影響を与えた。

トゥポウ I 世は、中央集権的な王国を作り上げる過程で、土地に対する権力の組替えを行い、従来、人々が領主（チーフ）に行っていた伝統的な慣行、ファトンギア (*fatongia*) を廃止したいと願った<sup>10</sup>。そのための改革では、各土地のチーフの権力を抑えるために、各村に中央政府が管轄する自治組織を作り、選挙によって地区長や村長を庶民が庶民の中から選べるようにした。しかし、庶民の一人である村長は村人に対する権威を保持できず、中央政府が意図した自治組織は村人の拘束力を弱め、村会議への参加者も減少した。

一方、キリスト教の布教が拡大して改宗者が増加すると、人々の日常生活はキリスト教の規律に沿ったものに移行し、それがやがてトンガ社会の規範や道徳観の中心となっていった。1820年代のチーフたちのキリスト教への改宗をめぐる苦悩の様子は、以下のように記されている。

トンガ人のチーフたちの力は、彼らの神聖なる祖先の力に由来していた。チーフであることは、タブ（禁忌）と宗教的な信念と儀式の本質を担っていた。そうした力が、チーフにとって、人々に対するチーフの権威を維持する支えであった。しかし、キリスト教の布教によって、従来の神々が拒否されることは、チーフ自身の神聖な成り立ちを否定することになり、チーフという地位と権威の正当性を失うことに繋がると考えられた。つまりチーフのキリスト教への改宗は、それまで支配し統制してきた人々の支持を失うことになるのではないか。これがタウファアハウ王（トゥポウ1世）をはじめ、チーフたちの苦悩であった。また人々に教えを説く宣教師たちが、



チーフのような存在になることも恐れていた<sup>11)</sup> [Campbell 2001:77、引用者訳]。

こうした社会変動とファトンギア (*fatongia*) の持つ言葉の範疇を関連づけて理解することは可能であると考えられる。キリスト教の布教以前、神聖なるチーフは人々の信仰の対象であり、土地に対しても強制力を持っていた。このため、チーフのために行われる労働は、人々の内的なもの（正義感・道徳・心・良心など）による義務に起因していた。しかしその後、人々の信仰の対象が、チーフからキリスト教に移行すると、人々の内的な義務の対象も教会に対して行われるようになった。現在そこには、土着的な信仰形態の要素はほとんど含まれていない。

その一方で、チーフの持っていた土地への義務は、王や政府が行う制度的なものへと移行した。しかし、実際の人々の外的な事情から生ずる義務は、政府や王にではなく、親族集団の長が務める村付きのチーフに移行したいえる。というのも現在、村には村長や地区長などの行政組織と並立して、村付きのチーフ（伝統的なチーフとは若干異なる）とトーキング・チーフ（チーフの従者）が存在するからである。これら村付きのチーフは、伝統的なチーフ名を継承する場合と、歴代の王によって新たに作られた称号が混在する状況にある。こうした村付きのチーフは、王族や貴族と何らかの親族関係を持ち、彼らは教会の幹部やグループ長を兼任する。つまり、村付きのチーフという、かつての伝統的なチーフが保持していた政治的権威の存続と、そうしたチーフが教会の幹部を兼任することで、村での宗教権威との融合が図られている。

トンガ王国では、キリスト教の厳格さが尊重され徹底されている<sup>12)</sup>。現代のエウア島の人々の生活は、教会によって形作られる道徳観とそれに基づいた日常生活で培われる習慣によって支えられている。そのなかでの寄付行為には、自発的になされる内的なもの、周囲の目や人の外圧による外的なものがある。ファカフオヌアを代表する村長の権威が村人に行渡らない一方で、多くの教会信徒を取り込むファカシアシの寄付には、現実の生活の中で暗黙のうちに起こる義務感（自発的で内的な義務感と親族間での外圧や競争意識）が大きく作用しているといえる。

- 1) エウア島の自由ウェズリアン教会は、島を統括する牧師長（1名）、村付きの牧師（数名）、青年部担当の牧師（1名）が、3年の任期で在職する。
- 2) トンガ王国は、歴史的にも行政的にも4つのグループ（トンガタブ島を中心とするトンガタブ、ハアパイ、ヴァヴァウ、そしてニウアトプタブとニウアフォオウを含むグループ）に分かれている。各グループには、知事が存在する。従来、エウア島はトンガタブ・グループに含まれていた。
- 3) エウア高校は、政府の高校である。島にはウェズリアン系のH高校とH農業学校がある。教会系の学校への寄付は、村単位で行われることは少ない。
- 4) エウア島は、自治にあたって、旧エウア地区と新エウア地区の2つの地区に分かれている。
- 5) ノーベレ（貴族）とは、トゥポウ1世が王国の統一の際に行った権力の組替えによる産物である。既存のチーフ（首長）の中から有力なチーフ数名を選び、ノーベレ称号を与え任命した。ノーベレからもれたチーフは、庶民（平民）となった。
- 6) エウア島にも土地法で定められている3つの土地区分（王族地、貴族地、そして政府地）が存在する。
- 7) 伝統的に村会議は上意下達の機関であり、下から上（村人からチーフ）への要望を伝える場ではなかった [Martin 1991; 青柳 1991:141]。
- 8) 1999年に行われた国会議員の選挙の際に、エウア島で登録された選挙権を持つ人（男性16歳以上、女性21歳）の数は、O村で1,031人であった。（フィールドワークより）
- 9) ミシナレを行わない宗派（ウェズリアン系トウカイコ教会など）もある。
- 10) 宣教師トーマス牧師（Rev. Thomas）は、このような悩みを持つチーフに対して、「宗教と政治が独立した別のものであること。チーフが行うのは聖職者が行うこととは異なること。人々は神にも王にも従う。」とチーフたちを説得した [Campbell 2001:77]。
- 11) トゥポウ2世とサローテ女王（トゥポウ3世）もこれらの慣行が王国を不安定なものにさせていると感じていた

[Wood-Ellem 1999:20]。

- 12) 日曜日の商業活動は一部（午後以降のパン屋の営業、観光地の島）を除いて禁止されおり、航空機の離発着も禁止されている。海で泳ぐことも、スポーツや娯楽を楽しむことも法律で禁止されている。

[謝 辞]

本論に関しての調査は、大和（現りそな）銀行アジア・オセアニア財団の助成により可能となった。トンガ王国での調査は、2000年2月～3月（予備調査）、2000年9月～2002年12月（トンガ政府の調査許可を得て本調査）、2001年11月～12月（経過調査）に行った。同財団とトンガ政府に記して感謝をささげたい。

[引用文献]

- 青柳まちこ 1991 『トンガの文化と社会』東京: 三一書房.  
Campbell, I.C. 2001 *Island Kingdom: Tonga Ancient and Modern*. Christchurch, Canterbury University Press.  
James, K. 1988 'O, Lead us not into

"Communication"...Christine Ward Gailey's Changing Gender Values in the Tongan Islands'. *Journal of the Polynesian Society*, 97/1:31-48.

- 1997 Reading the Leaves: the Role of Tongan Women's Traditional Wealth and other "Contraflows" in the Processes of Modern Migration and Remittance. *Pacific Studies*, 20/1:1-27.  
Martin, J. 1991 *Tonga Islands: William Mariner's Account*. 'An Account of the Natives of the Tonga Islands, in the South Pacific Ocean...' (5th edn, Volumes I & II combined) Tonga: Vava'u Press.  
Morton, H. 1996 *Becoming Tongan: an Ethnography of Childhood*. Honolulu: University of Hawai'i Press.  
Wood-Ellem, E. 1999 *Queen Salote of Tonga: The Story of an Era, 1900-1965*. Auckland, University of Auckland Press.